Hakuai Story

博愛物語

永訣との邂逅（Ⅰ）

憧れにも似た一途な希いが始まりだった。

希いの源流は、40数年の星霜を遡った

遥かな過日にあった。

大輪の花火が一瞬に消えゆくように、

それは、余りにも儚い愁傷の永訣だった。

勉は、1914（大正 3）年、K県宇土市に生まれた。生真面目な地方公務員の彼は、典型的な仕事人間だった。生来の生一本な性格から旺盛な克己心と人一倍の几帳面さを辛いほど併せ持っていた。寡言で、社交性に乏しい昔気質の父親だった。

1936（昭和 14）年 5 月、国境を巡って勃発した軍事衝突で、対戦国であった露西亜から完膚なきまでの壊滅的大打撃を蒙った、あの「ノモンハン事件」の残党でもあった。

この『死せる戦場』とまで称された激戦で、係争地となっ

たハルハ河畔を駆け廻(めぐ)り、命からがらに生還した気骨な大正生まれは、心身ともに骨太で、それまで病気(やまい)のひとつも患ったことがなかった。

家庭での徹底した亭主関白ぶりは、想像を超えて天下一品。酒も煙草も嗜(たしな)まず、ひたすら母親の作る団子や餡(あん)物に目のない、これもまた天下一の甘党だった。

そんな父親が溜飲(りゅういん)に悩まされ、

食欲不振と胃の不調を訴えていた。

「近頃、どうも胃が痞(つか)えてならん」。

そんな主訴(ふあん)を携えて、68年2月、K市に在った著名な病院の人間ドックを受診した。

往時(とうじ)、人間ドックと云う呼称(ことば)は、耳馴れない響きで、予防医療の社会的概念も乏しかった。受診した2泊3日を要した宿泊ドックは、あらゆる診療科の検査項目を網羅した総合的な健康診断だった。

母親も同席しての最終日での結果説明では、

「血圧と血糖値は、これからも定期的な観察が必要ですが、今のところ大きな問題はありません。ご安心下さい」。

面談医師からの『異常なし』とのお墨付きに、ほっと胸を撫で下ろし、安堵（あんど）するのだったが、父親の胃袋は、その後、日を重ねても一向に快復の兆しを見せなかった。

父親は、若くして地方公務員として消防署に入職した。

福岡市など幾つかの所轄署に配属され、某年、息子２人の出生地となったＮ市に赴任している。この地で、次長から署長へと昇進を果たし、公人としての安定した立場と晏然（あんぜん）な家庭を築き上げた。決して裕福さの有り余る暮らしでは無かったが、官舎住まいの暮らし向きに何の不自由もなかった。

大正・昭和初期を引き摺（ず）る封建的な家庭だったが、父権主義を涵養（かんよう）された環境にも何ら疑義を抱くこともなかった。寧（むし）ろ、厳格な夫婦の分担や互いに補完し合う役割に、言い知

れぬ諧和（かいわ）や安らぎを覚えていた。

この春、息子２人は、共に、公立高校と中学校の２学年へと進級した。平和で安穏な日々が、蕩々（とうとう）と故郷を下る遠賀川の川面のように過ぎて行くのだった。この有り触れた日々にこそ、純然たる幸せが隠れている真実（こと）など、若い高校生には思いも及ばなかった。この長閑（のどか）な田園の風景と穏やかな日々は、まさに天壌無窮とさえ惟（おも）われた。

そんな安息の日々にあって、父親の胃袋は、母親の煎じるあらゆる種類の薬草を飲み干したが、勇壮な夏祭りの頃が過ぎても胃薬を放そうとはしなかった。

季節は移ろい、校庭の銀杏（いちょう）が、澄み渡った秋天に鮮やかな山吹色の黄炎を噴き上げていた。

そんな菊日和の頃、厳格な父親にしては、如何(いか)にも珍しい休暇を取っていた。知人の情報(はなし)を伝(つて)に、胃腸病に効能があるという別府の湯治(とうじ)場に向かったのだった。

錦秋の山間に湯煙を求め、友人に誘われるまま、早暁から勇躍して旅立った。

ところが辿(たど)り着いた旅館の湯殿で激しい下血に見舞われた。胃腸病に効能があると記述された源泉の湯を、口にしてから間もなくの急迫(こと)だった。

急遽(きゅうきょ)、旅程を切り上げ、その足で家郷のＮ病院を受診した。Ｎ病院は、国鉄Ｎ駅から程近い、救命・救急医療を掲げる民間病院だった。早速、入念なＸ線検査や血液検査が実施され、その場で精密検査の必要性を告げられた。

「出来るだけ、早く、胃の精密検査を受けた方がいいですね。大学病院を紹介しましょう」。

満々の盈月が、皓々として、雲ひとつない夜空に浮いている。この日、N病院での検査を了えた父親が独り帰宅した。庭の飼い犬が、甘えた声で逸早く出迎えた。

玄関の仄暗い電灯が、父親を照らし出している。灯りに泛び上がった顔色は、血の気が引いたように蒼かった。玄関先に立った父親は、旅立ちの服装の気丈な恰好ではあったが、疲弊し切った表情には、何か差し迫った顛末を印象づける徴候があった。

水盤に挿された丈長の竜胆が、主人の唐突な帰還に心做しか凛と背筋を伸ばしている。病院を受診した事実すら

知らされてなかった母親の動顛ぶりは、迎えた時から尋常ではなく、まるで亡霊を見るかのように言葉を失っていた。

無言の父親は、極度の疲労からか、この不本意な事態の説明に戸惑っているのか、それとも敢えて平

静を装っているのか、一刻も早く急事の始終を知りたい家族の心中を尻目に、黙然として、日常どおり、奥座敷での着替えを優先するのだった。

焦げ茶色の丹前が愛用だった。着替え終え、居間で迎えた父親に、家族は、喰い入ように注視した。

小さな咳払いが癖だった。父親は、居間の椅子に腰を落とすと煎じ茶で咽喉を潤し、ひとつ咳払いをした後、漸く、帰宅の早まった理由を喋り始めた。旅館の湯殿での急迫した場面や帰途の車中での有様など要所を押さえて述懐した。聴かせる様な口調だった。飲み干す度に、母親の煎じ茶が注ぎ足された。

飼い犬が、主人の匂いに忙しなく息急き切っている。母親が短い言葉で叱った。動揺を凌ぎ平静さを取り戻した母親は、改めて、調書を取るかのように根掘り葉掘り一部始終を訊ねるのだった。被疑者のような父親は、思わしくなかった容体

の事を探偵に隠していたらしく、梅雨の頃から嘔吐を繰り返していた真相など、この時、初めて打ち明けた。

白い造影剤の残渣が、父親の口元に小さな固形となって、こびり付いていた。母親の心配性が、気鬱な名残を指摘した。父親は、怪訝な面持ちで口元を拭きながら、飲み難い造影剤を噯気を我慢しながら飲んだ有様など、改めて、検査の経緯までも縷述した。

こんなにも言葉の多い父親は珍しかった。日頃と違った口数が、ざわめく胸中を吐露していた。母親の質問が、検査結果に向かおうとした時だった。

「もう出血も止まったごたぁ。真から疲れた」。

母親の尋問に、そろそろ終止符を打ちたいのであろう。語気のだるさに、父親の意向が感じ取れた。この場の終息宣言を表意するかのように、小さな咳払いを繰り返した父親の表情には、濃い困憊の色が宿っていた。蛍光灯の下で見る顔色は、

先程よりも、更に、血の気が引いて蒼白だった。

母親が煎じ茶を注ぎ足しながら

「はやく横になって」と、促すと、父親は、志野(ゆのみ)で掌を温めながら、ゆっくりと、それを飲み干した。

閉め忘れていた縁側の硝子戸(がらす)から這うように、夜気が忍び込んできた。父親の視線が庭先に投げられると、飼い犬の忙しなさが一段と強まった。縁側(えんがわ)に前足を預(あず)けた愛犬は、労(いた)わるような目をして尻尾を振った。

「これまで、ずうっと頑張りずくめやったからね」。

「躰(からだ)を休めなさいって、お神さんが云(ゆ)ってあるとよ」。

母親は、自らを納得させるかのように言及した。

そんな言下に、漸く、尋問(ははおや)から解放された父親が鞄(かばん)から取り出した包みは、誰かに供する土産(みやげ)なのか、自分のための要物(もの)なのか、温泉地で買い求めた好物の饅頭だった。

「2月の健診では、異常がなかったんやろ。あれから、幾月(なんぼ)も経(た)っとらんし、そげん悪(わる)いはずは、なかろうもん。心配せんでも大丈夫たい」。

医学知識に疎い高校生は、如何にも安気に考えていた。

「そうやもんね」。

母親の相槌(あいづち)が、間髪を入れずに打たれた。

人間ドックで、言い渡された『異常なし』のお墨付きが、心の拠(より)り処(ところ)となっていた。

その夜、父親は、造影剤(バリューム)が痞(つか)えていると言い訳して、夕飯を摂らなかった。夜気の擦(す)り寄ってくる肌寒さに、硝子戸を閉めに席を立った。

冴(さ)え冴えとした月明かりが

庭から濡れ縁を越えて、

廊下にまで辿(すべ)っている。

薄墨の絹張りを蔽(おお)ったような夜空には、星々が瞬(またた)いて、

一段と輝きを増した満月が皓々として浮いていた。

清かな月明かりに、庭の八重桜の影が仄白い家屋を掠めて堕ちている。影を吸った庭の草蔭は、更に肌理こまかな翳りを抱いている。その翳りの奥で、小さな生命が慄えていた。年を越せない儚い生命だった。

この日は、夜更けまで、隣室の両親が押し殺した声で、これからの対応を語り合っていた。

草蔭で慄える蟋蟀の啼き声で、途切れ、途切れ、掻き消されそうになる愁宵の会話に、独り、じっと聴き耳を立てていた。

著者　　那須　良昭

発行所　　医療法人財団 博愛会

〒810-0034
福岡市中央区笹丘 1-28-25
tel:092-741-2626　　fax:092-741-2627

本書に記載されております文書につきましては、転載・無断使用を禁じます